

# 持続可能な社会とはどういうことか 参考資料

パブコメセミナー

2025年1月20日(月)

武蔵野大学名誉教授/京都大学特任教授

一方井誠治

# ブルントラント委員会の持続可能な開発

## <定義>

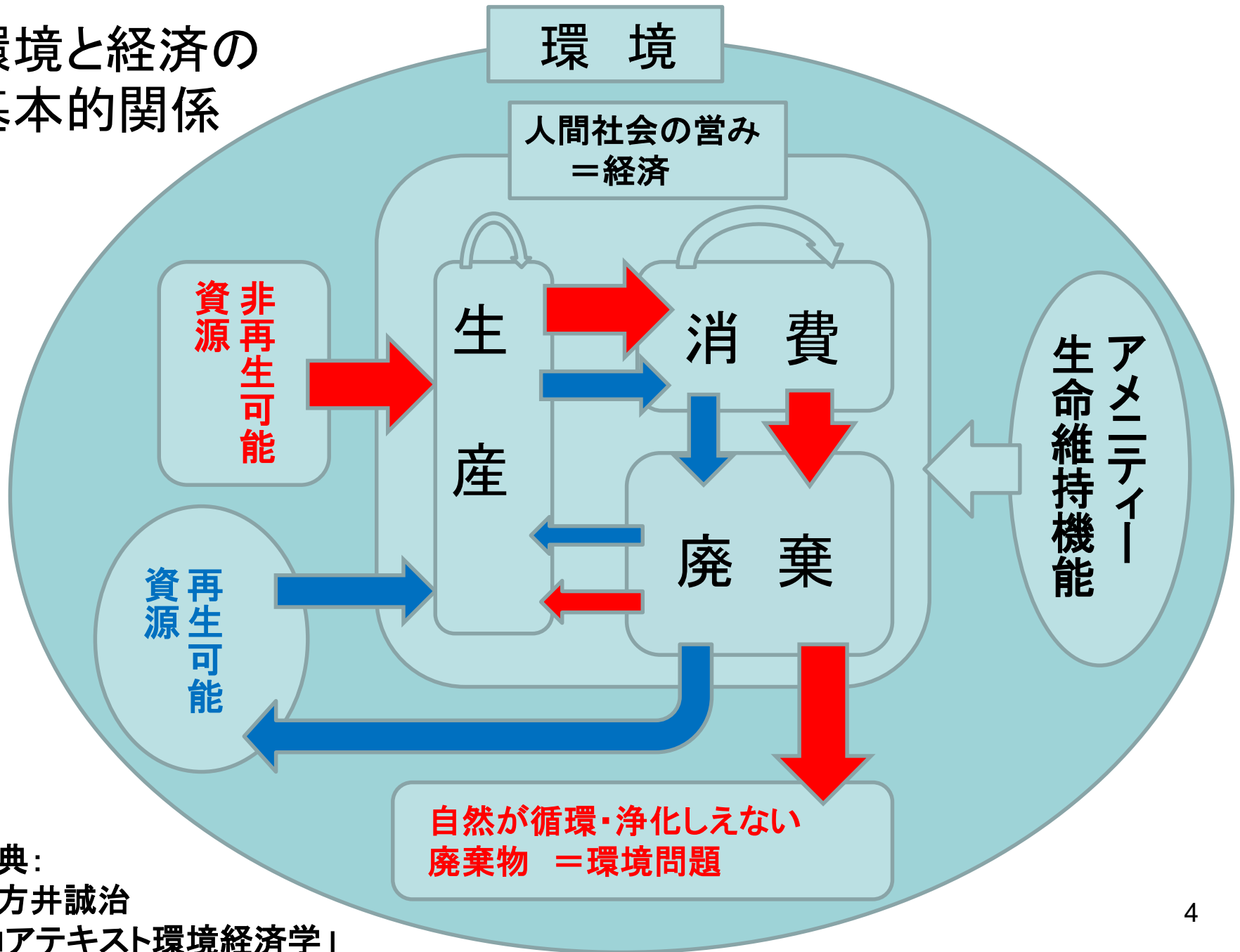
持続可能な開発とは、**未来の世代が自分たちの欲求を満たすための能力を減少させない**ように、現在の世代の欲求を満たすような開発である

→具体的にどこまで開発を進めていいのかという限度が見えてこないという批判

# 持続可能な発展に関する ハーマン・デイリーの3原則

- 再生可能な資源[大気、水、土壌、森林等]は、それが**再生できるペース**で使うべきこと。
- 再生不可能な資源は、それが**再生可能な資源で代替できるペース**で使うべきこと。
- 廃棄物や有害物は、**自然が受け入れ浄化できるペース**で排出すべきこと。

# 環境と経済の 基本的関係



出典：  
一方井誠治  
「コアテキスト環境経済学」

# 持続可能な発展に関する二つの考え方

○強い持続可能性とは、人間の経済成長には「最適な規模」があり、自然資本は人間の福祉の究極的な源泉であることから、森や海など自然資本の制約を超えて成長することは不可能であるという考え方。

○弱い持続可能性とは、自然資本は人間の福祉の決定要因のひとつであり、自然資本は、その他の人工資本等で代替可能であるという考え方。

# 熊沢蕃山の思想

○熊沢蕃山は、江戸時代初期の陽明学者(1619年～1691年)。  
中江藤樹に師事。

○その書「集義和書」では、「**万物一体**と言ひ、**草木国土悉皆成仏**と言うときは、同じ道理のように聞こえ候」という質問に以下のように答えている。

○「万物一体とは、天地万物みな大虚の一気より生じたものなるゆえに仁者は一木一草をも、その時なく、その理なくては切らず候。いわんや飛潜動走のものおや。草木にても強き日照りなどにぼむを見ては、我が心もしほるるごとし。雨露の恵みを得て青やかに栄えぬるのを見ては我が心も喜ばし。これ万物一体のしるしなり」

(出典:加藤尚武「新・環境倫理学のすすめ」)

# J.S.ミルの思想

○J.S.ミルは、英国の哲学者、経済思想家(1806年-1873年)。

○その主書「経済学原理」で次のように述べている。

○「**自然の美観壯観**のまえにおける独居は、思想と気持ちの高揚と一ひとり個人にとってよい事であるばかりでなく、社会もそれをもたないと困るところの、あの思想と気持ちの高揚と一を育てる揺籃である。また自然の自発的活動のためにまったく余地が残されていない世界を想像することは、決して大きな満足を感じさせるものではない。一中略一もしも地球に対し、その楽しさの大部分のものを与えているもろもろの事物を、**富と人口との無制限なる増加が、地球からことごとく取り除いてしまい、そのために地球がその楽しさの大部分のものを失ってしまわなければならぬとすれば**、しかもその目的がただ単に地球をしてより大なる人口ーしかし決してよりすぐれた、あるいはより幸福な人口では無いーを養うことを得しめることだけであることすれば、私は後世の人たちのために切望する。**彼らが、必要に強いられて停止状態にはいるはるかまえに、自ら好んで停止状態にはいることを。**

(出典: J.S.ミル「経済学原理(四)末永茂喜訳、岩波書店)

# 田中正造の思想

- 田中正造は日本の政治家(1841-1913)
- 衆議院議員を6期つとめ、日本の足尾銅山鉍害問題の解決に奮闘、最後は衆議院議員を辞して天皇に直訴。
- しかしながら、鉍害被害は解決せず、被害の中心となった渡良瀬川流域の谷中村は調整池にされ廃村となる。
- 「**真の文明は、山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし**」の言葉を残す。



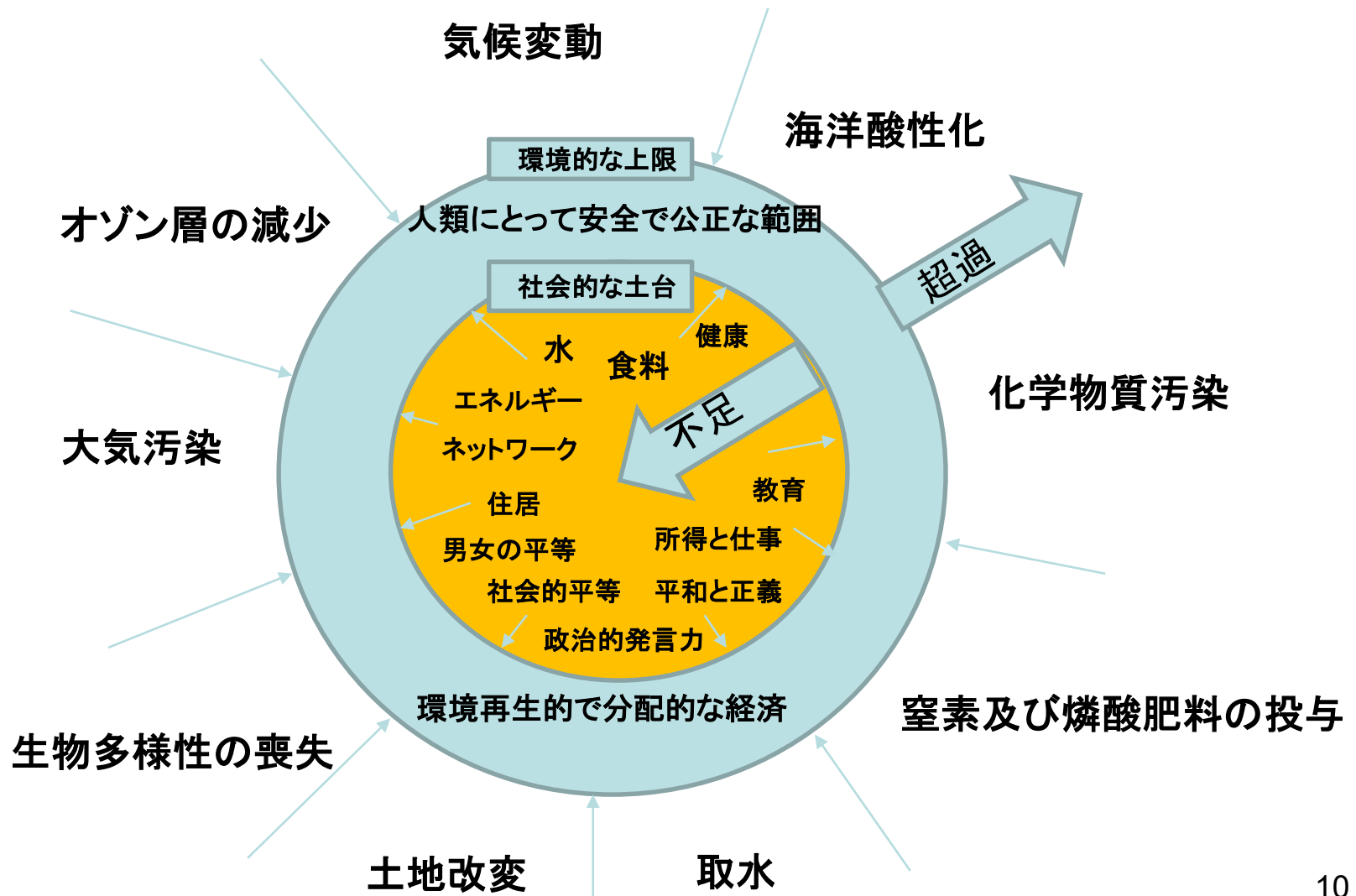
# プラネタリーバウンダリー

- スウェーデン、レジリアンスセンターのヨハン・ロックストロームとウィル・ステファンが2009年に提唱した環境保全上、超えてはならない9つの境界線

<既に上限を超えているものの例>

- 二酸化炭素濃度: 350ppm (400ppm↑)
- 窒素肥料の投与: 6820万トン (1億5000万トン↑)
- 土地改変: 伐採以前の森林面積の75% (62%↓)

# ケイト・ラワースのドーナツ経済学



# 国連の持続可能な開発目標(2015)



# ストックホルム・レジリエンスセンター のウェディングケーキモデル

